

アイヌの地理的認識と上（かみ）と下（しも）*

切替英雄

2012年12月28日

1 地理的認識の拠り所となる座標軸

アイヌの地理的認識、空間把握は何を基準にしてなされていたか。我々にとっては東西南北という方位が有効な座標になっていると言っていいだろう。それは太陽、月、星によって規定されるものだから、天文的方位と呼ぶことができる。アイヌにおいてはどうかであったのだろうか。北海道のアイヌの生活においては河川が座標軸であった。河川およびその流域が生きていく上で必要な資源を得るための主要な領域であったことは我々のアイヌ民俗調査 [21] から明らかであるが、ここでは資源を供給するという側面から河川を見るのではなく、アイヌの生活空間が河川によっていわば構造化されていたこと、すなわち、河川が地理的認識の拠り所となるだけでなく、生活空間に秩序を与えて生活様式を規制していたものであったことを示す。

また、太平洋沿岸地方のアイヌにおいては東方を上位とする観念が見られるが、これが河川とは別次元の軸をなして生活空間を構造化していたことも示したい。本稿で用いられる主要な資料は十勝川の支流、利別川流域、本別の沢井トメノ氏から得られたものであるが、この地方ではこれら2つの軸が複合していることが見いだされるのである。

主にアイヌ語の分析を通して以上のことが述べられるが、同時にこれらの地理的認識、空間把握の拠り所となる軸がアイヌ語という言語構造そのものに反映されていることも明らかにされよう。

なお本稿でアイヌというのはおよそ20世紀前半の北海道のアイヌ社会で成人したアイヌを指している。また、本別方言というのは、上記の沢井トメノ氏のアイヌ語である。

2 挨拶言葉に示される交通路としての川

アイヌは河岸段丘の上に集落を形成した。^{*1} 集落が臨む河川は、pét と呼ばれる [36, pp.58-59]。pét が重要な交通路であったことを示す挨拶言葉がある。

この研究の主要な部分は1980年、1981年の十勝地方本別における著者のフィールドワークで得られた資料にもとづいている。その調査結果は日本言語学会第82回大会で発表され、要旨は言語学会誌『言語研究』81号(1982)に掲載されている(pp.123-126)。また、我々が渡辺仁の指導で行っていたアイヌ民俗調査(北海道教育委員会1981-1992)で得られた資料をこれに加えて執筆されたSome Geographical Concepts of the Ainuという論文が岡田宏明『環極北文化の比較研究』(北海道大学文学部、1993年、文部省科学研究費補助金、総合研究A 03301040)に掲載されている(pp.103-120)。その後1993年の論文に新たに得られた資料が加わったものが「アイヌの地理的認識」として『北海道開発の視点・論点』(北海学園大学開発研究所、1998年、pp.67-89)に掲載された。その後の考察、新たに得られた知見を加え書き改めたものが、津曲敏郎編『環北太平洋の言語』14(北海道大学大学院文学研究科、2007年、pp.35-56)に掲載されている。本稿は、筆者の思い違いなどを正したものである。

^{*1} 沢井氏の育った本別のチエトイは、現在の市街の川向う、利別川右岸の小高い河岸段丘にあった村である。もっとも、日高地方沙流(さる)川流域の貫気別(ぬきべつ)に見られるようにnáyと呼ばれるささやかな谷あい集落が形成されることもないではない。

我々は沙流川の支流、額平川^{ぬかびら}右岸^{右おい}の荷負という集落に住んでいたアイヌの女性（西島テル氏）を数度訪問し、額平川流域のおよそ 1900 年前後のアイヌ文化の復元を試みたことがある [28, pp.9-78]。西島氏は我々が辞去するたびに ?epétciwsakno と述べ、別れの挨拶とした。その意味を尋ねると「事故に遭わないで無事に戻りなさい」ということだと言う。「こんにちは」「こんばんは」「さようなら」というような定型の挨拶言葉の発達をみなかったアイヌ語には珍しいことと我々の記憶に残った。^{*2} この挨拶言葉は分析を許さない慣用句のようにみえ、それ以上の説明を聞くことはできなかったが、語源的に分析すれば、?epétciw と sákno に分けられ、おそらく最初の単語は、?e- 「～の頭」「～の先端」（部分接頭辞）、pet 「川」（名詞）、ciw 「～が～に刺さる」（二項動詞）の三つの要素からなる複合動詞である。すなわち ?e-pét-ciw 「～の頭が川に刺さる」つまり「～が川に転落する」（一項動詞）という意味になる。これが名詞化して（自動詞は動作を表す名詞となりえる [4, p.503]）、「川に転落すること」となったものに sak-no 「～なしで」（sák 二項動詞 「～が～を欠く」、-no 動詞について副詞、副詞句を作る接尾辞）がついたのであろう。全体で「川に転落することなく（行きなさい）」という意味と解せられる。この挨拶言葉の存在は川の交通路としての重要性を示しているものだ。

本別方言などに ?esítciw という ?epétciw と平行的な構造の動詞があるが、その存在はこの ?epétciw の分析を支持するものとなっている。

- 1) ?e-sít-ciw ～がつんのめる（sít ← sír 地面）
- 2) ?e-pét-ciw ～が川に転落する

3 先端・末端を表す接頭辞と接尾辞

前の節で、?e-pét-ciw の「～が川に転落する」という解釈の妥当性を ?e-sít-ciw 「～がつんのめる」という単語との比較に求めた。この単語には ?o-sít-ciw 「～が落ち着く、定住する」というペアをなす単語がある。西方の方言（沙流方言）にもこのペアは存在する [20]。

- 3) ?e-sít-ciw ～がつんのめる
- 4) ?o-sít-ciw ～が落ち着く、定住する（sít ← sír 地面）

?e- が「～の頭」「～の先端」という意味を持っているのに対して ?o- は「～の尻」「～の末端」という意味である。これらは、「頭」なり「尻」なりの所属先を示す名詞項を補語とする動詞を派生する接頭辞である。今、この二つの接頭辞を、所属先の部分をなしているものを指示しているということから「部分接頭辞」と呼ぶことにする。このような頭・尻（あるいは先端・末端）のペアは部分接頭辞のほか、再帰接頭辞にもみられる（?e- 「自分の頭」「自分の先端」、?o- 「自分の尻」「自分の末端」。部分接頭辞と同音異義の関係にある）。また、複合名詞を作る派生接尾辞にもみられる（-pa 「～の上」、-kes 「～の下」。例、kotánpa 「村の上」、kotánkes 「村の下」。アイヌの集落は、川に平行に家が並んでいたようである）。

部分接頭辞と再帰接頭辞とは、十勝方言で同音異義になっているが、西方の方言（石狩方言などを除く）では、再帰接頭辞に h- がついている。また十勝方言の再帰接頭辞でも、アクセントのある音節ではこの h- が現れる。今「～が起きあがる」という意味の単語を例とすれば、再帰接頭辞の方言間の対応は表 1 のようにな

^{*2} 定型の挨拶言葉は貨幣のように便利なものである。挨拶すべきとき出来合いの慣用句がなかったなら、我々はいちいち頭を悩まして文句を作らなければならない。アイヌはそうしたのである。人口密度が希薄（北海道に 15000 から 20000 人）であるため交際が希であったためであろう。出会いというものが今日の我々には考えられないほど大切なものだったからとも考えられる。

表1 ?o-puni の東西の対応

アイヌ語祖語	東方言	西方言	意味
*ho-púni	?o-púni	ho-púni	～が起きあがる
*ku-hó-puni	ku-hó-puni	ku-hó-puni	わたしは起きあがる

表2 再帰接頭辞、部分接頭辞、applicative の接頭辞の東西の対応

	アイヌ語祖語	東方言	西方言	意味
再帰接頭辞	*he-	?e-	he-	自分の頭
再帰接頭辞	*hé-	héh-	héh-	
再帰接頭辞	*ho-	?o-	ho-	自分の尻
再帰接頭辞	*hó-	hóh-	hóh-	
部分接頭辞	*?e-	?e-	?e-	～の頭
部分接頭辞	*?o-	?o-	?o-	～の尻
applicative	*?e-	?e-	?e-	～で（手段）
applicative	*?o-	?o-	?o-	～に対して（対象）

る（puni 「～が～を持ち上げる」、?o-púni 「～が起きあがる（～が自分の尻を持ち上げる）」）。

部分接頭辞の ?e- 「～の頭」、?o- 「～の尻」と再帰接頭辞の ?e- 「自分の頭」、?o- 「自分の尻」とは語源的にも異なるものであることは明らかである。なお、アイヌ語では、やっかいなことに金田一が applicative と呼んだ接頭辞にも*³ 同音異義の ?e- と ?o- があり、これらすべてが動詞に付く派生接頭辞であることから、アイヌ語研究に混乱をもたらしたものだ。これらの接頭辞が峻別できるようになったのは、田村すず子の「アイヌ語沙流方言の合成名詞の構造」[19] が現れて以来のことである。/?/ については §6 を参照されたい。

4 川に沿っての移動

日高地方の沙流方言と胆振地方の幌別方言では「川に沿って」といういわば抽象的な表現が存在せず、下に示すように、上流に向かうか、下流に向かうかによって別々の副詞句で言い分けることが金田一以来知られるようになった。この事実もまたアイヌと川との深いつながりを示すものと考えられる。

5) pet turasi 川に沿って上^{かみ}へ [13, p.61] [3, pp.37-38]

6) pet esor(o) ~ pet pes 川に沿って下^{しも}へ [13, p.61] [3, pp.37-38]

もっとも、十勝地方本別などの方言では、pet esor(o)、pet pes という句は存在せず、上流への移動、下流への移動ともに pét turasi という。ただし、この方言に ?esóro という後置詞がないわけではない。

7) Ruyánpe rúy wa né?an ruyánpe wakka ní ?esoro rán kor

雨が降ってその雨水が木を伝って落ちると

8) ?Ayápo ?etap tánto sír sések káspa wa kunánu ?esoro wákka rán ?um an.

*3 金田一は「充当相」という誤解を招きやすい用語も用いている。

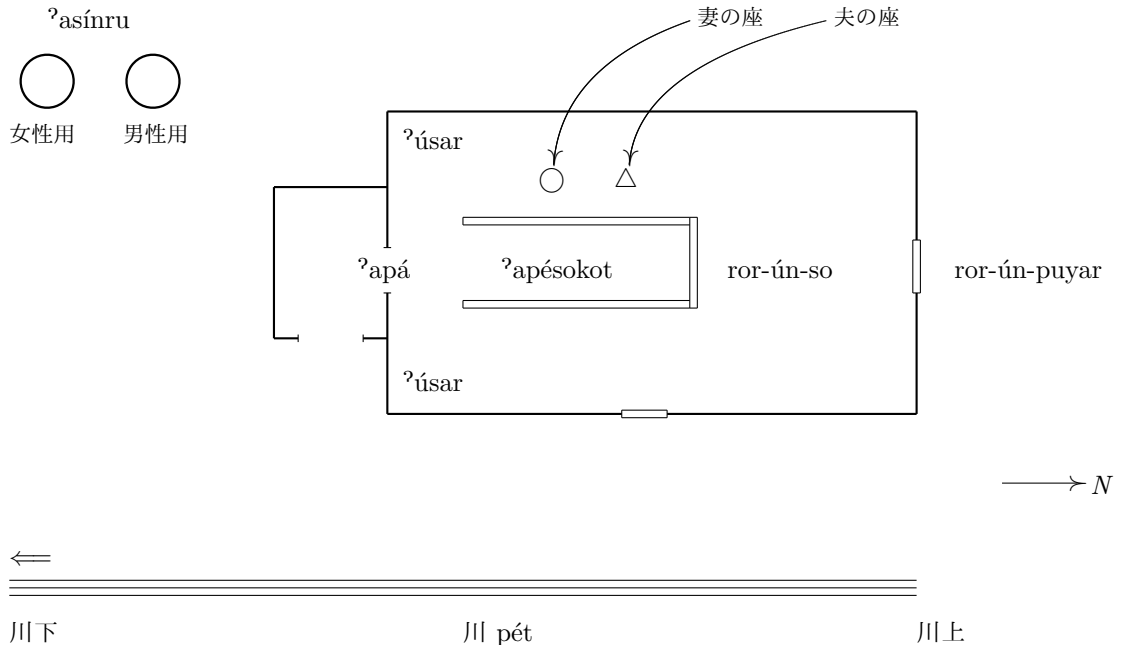


図1 アイヌの家屋（本別 沢井トメノ）

おやおや、今日は暑すぎて顔を伝って汗が落ちる。

このように 'esóro はものが下降して (rán) 経由する場所を導く後置詞として用いられる（pes については、その存在が確認されていない）。この 'esóro が十勝方言などで、なぜ pét と結合しないのかは不明である。

5 家屋と川の関係

河岸段丘に建てられるアイヌの家屋は、いくつかの地方で ror-ún-puyar 「神窓」*4 が上流を向いており、人の出入りするところ 'apá は下流を向いている（図1）。川の発する山岳の方角（本別では北）は神聖なものと考えられていた。沢井氏は「北」が kamúy 'erók kotan 「神がいる世界」であると言う。

山にいるほとんどすべての動物は神であると考えられている。狩猟はこれらの神々を人間の世界に招くことに他ならない。人間は獲物を神聖な客として迎えもてなす。この考え方は知里幸恵の『アイヌ神謡集』（1923）の第1話に美しく敬虔に描かれている。この神謡が仮に伝承されたものではなく、幸恵の創作であったとしても、なおそれはアイヌ社会に一般的であった神と人間との互酬関係がよく示されている。さて、獲物を家に入れる、すなわち神を招き入れる入り口、また神の国へと送り出す出口がこの ror-ún-puyar なのである。このため、神とみなされていない魚類は人間が用いる出入り口 'apá から家に入れられる（たとえば我々の民俗調査 [25, p.18]などを参照）。

また、女性は ror-ún-so と呼ばれる座に座することは許されない。ror-ún-so は迎えられる神の座、すなわち獲物が置かれる場であり、人間では成人男性のみが座する権利を持つ。女性の座は出入り口に近い 'úsar とよば

*4 神窓は北海道のアイヌにとって普遍的であるが、その名称には方言差がある。我々の調査 [21] では、rorunpuyar（旭川地方、十勝地方、静内地方、浦河地方、様似地方、美幌地方、千歳地方）のほかに、rorunpiraw（浦河地方）、rorunpuray（鶴川・穂別地方、有珠地方）、kamuy puyar（屈斜路地方）、poro puyar（沙流地方）、eronnepuyar（沙流地方）、piyar（白糠・釧路地方）が採録されている。

れる空間に限られている。主婦の座は夫のそばにあるが、ror-ún-so からより遠くに位置する。一般に女性は kamuy ʔerók kotan 「神のいる世界」からできるだけ遠ざけられる。

狩猟は鹿猟を除いて*5 もっぱら男性の仕事であって、男性のみが動物神に語りかける権利を持つ。動物を祭る儀式（動物の魂を神の国に送り返す儀式）においては男性がこれを主宰し、女性には副次的な任務しか与えられない。女性は動物の解体作業からも排除される。

5.1 ストープの導入によって生じた困惑

火の神は知里幸恵の『アイヌ神謡集』などで炉の中に赤い着物を着て坐っていると象徴されるが [14, pp.139-140]、

9) apehuchi	火の老女神
kamui huchi	神の老女が
hure kosonte	赤い着物
iwan kosonte	六枚の着物に
kokutkor kane,	帯をしめ、
iwan kosonte	六枚の着物を
opannere,	羽織って*6

人間の祈りをほかの神々に伝える伝令である。それゆえ祈り言葉を唱えるときは、祈りがほかの神々に伝わるように ror-ún-puyar 「神窓」が開けられる [22, p.85]。

ストーブが用いられ始めたとき伝統的な生活を維持しようとするアイヌの間に一種の戸惑いがあったであろう。火の神は ror-un-puyar に相対するものでなければならないのに、ストーブはそれを封じる鉄の箱であり、火の神とほかの神々との接触を阻むものとみなされたことは日高地方静内（図 16）での我々の調査から分かっている。静内の織田ステノ氏^{おりた}によれば、ストーブの空気取り入れ口を huciape sikihi 「火の神の目」と呼び、ror-un-puyar に「目」が向くように炉 apeoi（本別の ʔapésokot、図 1）の中にストーブを設置したとのことである [24, pp.96-97]。

6 川に規定される方位名称（本別）

川を軸とする上下関係がアイヌの生活にとって重要な意味を持つことは以上述べてきたことから明らかであろう。それは人間の世界と神の世界との配置を決するのみならず、家の構造にも、さらに性差による社会関係にも及ぶものであった。

方位を知るためにアイヌは磁石を利用したわけではない。また、いわば天文的現象についての関心が希薄であったことは山田秀三のアイヌ語地名研究から [38, pp.275-323]、また服部四郎が組織した基礎語彙調査 [9, p.28, 238, 239] から推察できる。特に 月と太陽が同じ単語 cúp で示されるのはそのはなはだしい例ではな

*5 鹿猟の実態については分からないことが多い。これは我々の調査のインフォーマントの成長した時代、鹿が絶滅に近い状態にまで減少していたためと思われる（犬飼「北海道の鹿とその興亡」[10]）。したがって、釧路地方白糠の根本与三郎氏の鹿猟の体験談はきわめて貴重である [34, pp.98-102]

我々の調査 [21] で知られたところで、神と考えられていないと確実に判断できる動物は鹿と魚類である。これらが女性による捕獲の許されているものであることは注目に値する。

*6 opannere ← o-par-ne-re v₂ が〜の末端（裾）を翻す。pannere 〜が〜を翻す。o- は部分接頭辞。

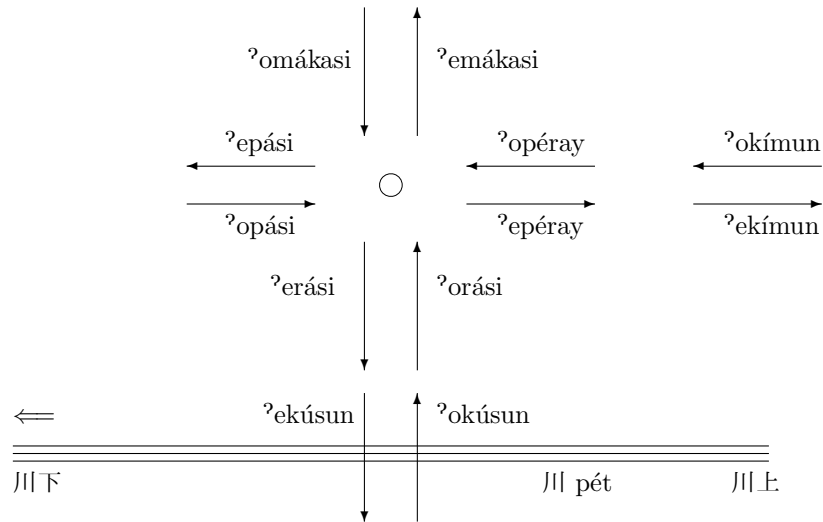


図2 6組の方位を表す副詞

いかと思われる。^{*7} アイヌ語は南北を絶対方位として示す単語を欠いている。方位を示す単語は川を軸とする地理的要因に規定されるものであり、その意味で相対的なものである。このことは、服部の『アイヌ語方言辞典』の東、西、南、北の項をみれば明らかである [9, p.238, 239]。

沢井氏によれば、利別川流域では、6組の副詞をもって方位を示す（図2）。これを分析すると、まず上方向と下方向との対立が認められる（図3）。これには、川の流れに従う上・下の関係と、河岸段丘および後背の山地と川との間にみられる高・低の関係とが関与している。すなわち、川に対して平行か垂直かの対立が認められる。この2種の上方向・下方向の対立を以下「地理的な上下の対立」とか「河川を軸とする上下の対立」と呼ぶことにする。さらに、移動にあたっての目標点か出発点かが対立する（図5）。方位の体系はこの3つの対立する特徴から構成される。

川を渡っての移動に伴う方位 ?ekúsun/?okúsun と、「山へ」・「山から」と訳すことのできる ?ekímun/?okímun の組とがこの体系の外にある。

これによく似た体系は他の地方にも見られる。図6は日高東部の^{さまに}様似での調査に基づくものである。

様似では (h)eperay など、語頭に h- がつくのか否かはっきりしないものがある。これはインフォーマントの岡本ユミ氏の答えに揺れがあったものである。先に再帰接頭辞で見たように、本別の沢井氏の言語では他の方言に現れる h- が、アクセントのない音節で非摩擦音的な喉音音素^{*8}に置き換わる（例 ?osípi 「～が帰る」。kuhósipi 「私は帰る」）。

また、様似では「浜へ○から」「沖へ○から」など、海浜にふさわしい副詞が見られる。また東西を示す副詞 (ekoykaun と ekoypokun) もみられる（これが本当に天文的方位としての東西に当たるのかは、なお検討

^{*7} ただし、月を sírkunne cúp kamuy 「夜の cup 神」 太陽を sírpeker cúp kamuy 「昼の cup 神」といい分けることは可能である。

^{*8} 沢井氏のアイヌ語では明瞭に声門閉鎖音として現れることが多いが、単なる声帯の緊張で終わったり、また消失することも普通に起こる。

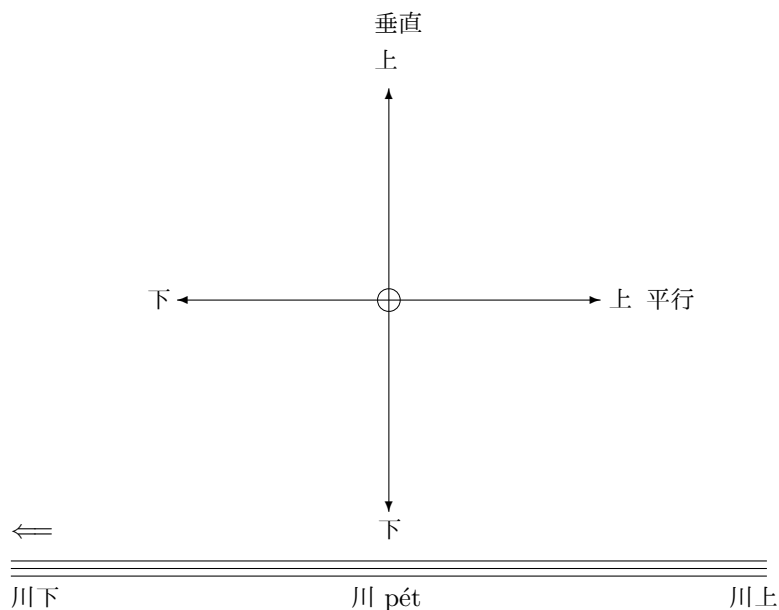


図3 地理的な上下の対立と川に平行・垂直の対立



図4 出発点と目標の対立

を要する。§11.4 参照)。

本別、様似のそれぞれの形から推察できるように、方向を表す副詞についている ?e- : he-、?o- : ho- はもとは *he-、*ho- であったことは明らかであって、再帰接頭辞の *he-、*ho- (§3 表 1, 2/) とたぶん関係があるだろう。

7 移動を表す4つの動詞

アイヌ語では pét 「川」を軸とする空間において4つの移動を表す動詞が一つの体系をなしている。それらは伝統的に次のように解釈されてきた（単数形と複数形を並べて示す。Batchelor の ariki は、現在では ?árki などのように二音節で表記される） [1]。

- | | |
|---------------|---|
| 10) oman/paye | “to go”, “to advance”, “to proceed” |
| ek/ariki | “to come” |
| san/sap | “to descend”, “to flow along as a river” |
| ran/rap | “to descend”, “to come down as rain”, “to alight” |

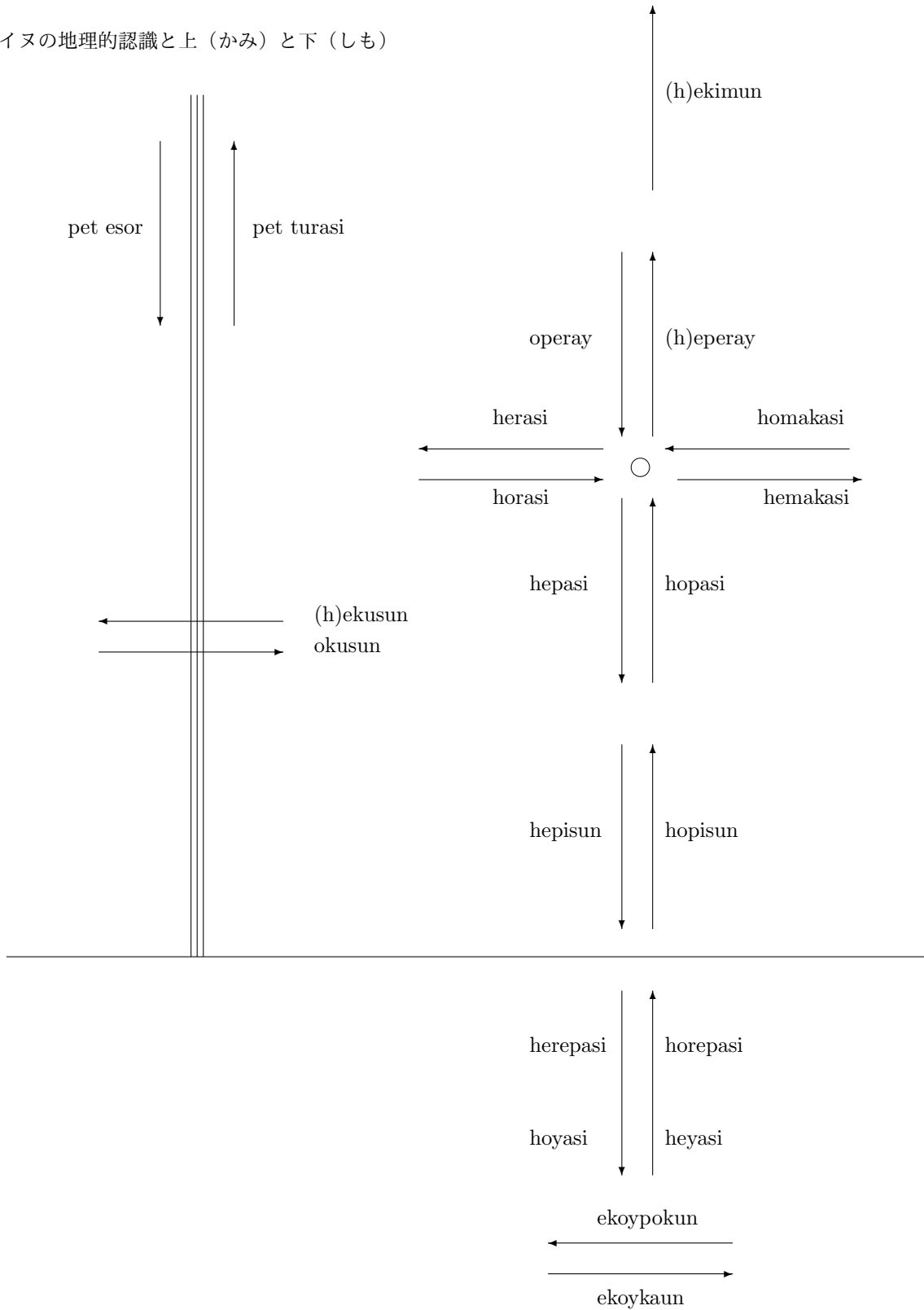


図5 方位を示す副詞（様似）

しかし、本別での調査に基づくならば、上の解釈では不完全である。この方言では4つの移動を表す動詞は *pét* を軸とする空間で、もっと限定された意味を持つものとして用いられている。図7は一部を除いて*9次節7.1で示す例文から作図したものである。これらの例文は沢井氏が途切れなく、あたかも物語を語るように、この順番で述べたものであり、まるで過不足なく、体系がむき出しになって言語化されているかのような印象があり、興味深い。

7.1 移動を表す4つの動詞は河川を座標軸とする体系をなす

- 11) *ʔErási rán wa rá ʔun ʔékasi turá wa ʔék!*
川に おりて、川 のそば に住んでいるお爺さんを連れて おいで。
- 12) *ʔOrási ʔék kor ʔan.*
川 の方から 来る ところだよ。
- 13) *ʔEpéray ʔomán wa húci turá wa sán!*
川 上に 行って、お婆さんを連れて おいで。
- 14) *Péna ta ʔán húci ʔopéray sán kor ʔan.*
川 上にいるお婆さんは 川上から 来る ところだよ。
- 15) *ʔEmákasi ʔomán wa mák*10 un sapo ták wa rán!*
裏山に 行って 裏山の姉さんを招いて おいで。
- 16) *Mák un sapo ʔomákasi rán kor ʔan.*
裏山の姉さんは 裏山から 来る ところだよ。
- 17) *ʔEpási sán wa yúpo turá wa ʔék!*
川 下に 行って 兄さんを連れて おいで。
- 18) *Pána ʔun yúpo ʔopási ʔék kor ʔan.*
川 下の兄さんは、川下から 来る ところだよ。

ʔán【一項動詞】～がいる。ʔékasi【名詞】お爺さん。húci【名詞】お婆さん。kor ʔan【助動詞句】…するのが目に入る。mák【名詞】（川を表と見た場合の）裏山。pána【名詞】川下。péna【名詞】川上。rá【名詞】川のそば。ta【後置詞】～に○で（場所）。sápo【名詞】姉。ták【二項動詞】～が～を招く。turá【二項動詞】～が～を連れて行く。ʔún【二項動詞】～が～に住んでいる。wa【接続助詞】（…し）て。yúpo【名詞】兄。

*9 「川向こう」を意味する場所を表す名詞 *kús* は、沢井氏から得ることができなかった。ここでは、石狩方言の *pét kus ta* 「川向こうに」（砂沢クラ氏）という句に現れる *kus* で補った。

*10 *mák* に対応する概念が日本語にはないので、とりあえず「裏山」と訳す。

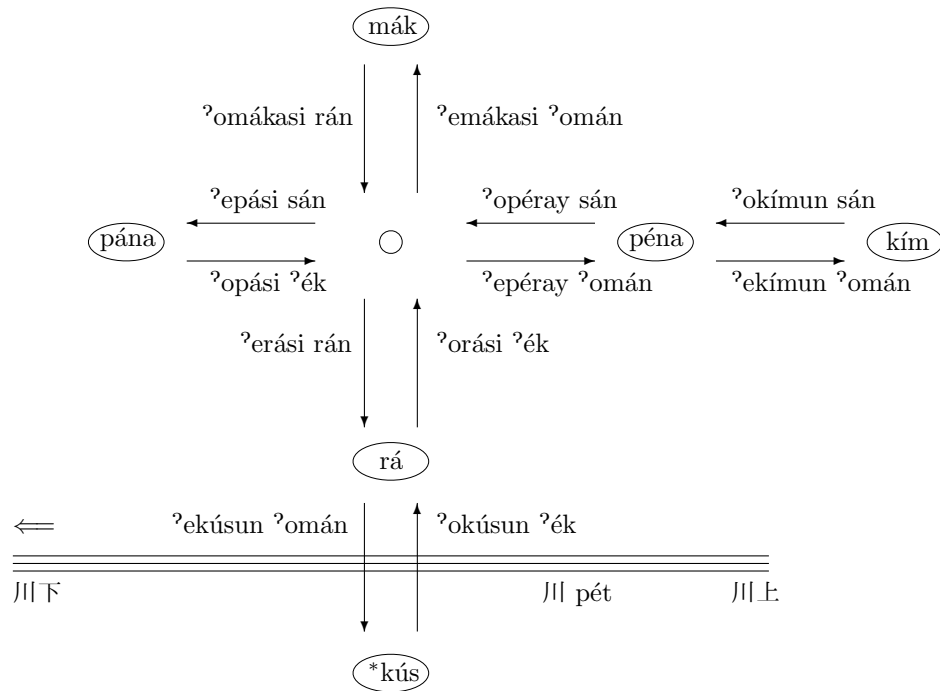


図6 移動を表す4つの動詞の用法

7.2 地理的な上下の対立が無効となる場合

川を渡る移動を表すものとして次の例文が得られた*¹¹。

19) Pét ?oske peka ?ekúsun payé?án.*¹²

川の中を通って 川向こうへ 行く。

20) ?Okúsun ?árki?án.

川向こうから 来る。

このように、川をまたぐ移動を示すさいは、?omán/payé と ?ék/?árki だけが用いられる。この場合、河川を軸とする上下の対立は無効であり、目標点と出発点との対立だけが関与している（図8）。?omán/payé に対して ‘to go’、?ék/?árki に対しては ‘to come’ とする Batchelor の意味記述は、このように地理的な上下の対立と無関係の場合にのみ当てはまる。地理的に上下の対立が認識されていないときには、移動に関して目標点と出発点の対立だけが意味をもつ。そのような例をさらにあげよう。

*¹¹ この二つの例文は、日本言語学会第82回大会における浅井亨氏の助言にしたがって調査した結果得られたものである。

*¹² -?án は不定人称辞。

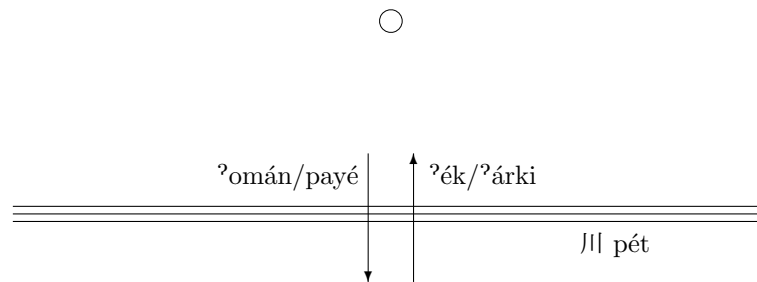


図7 川を渡る移動

- 21) ?Enón ?e?óman ru he?
お前は どこへ行く のか。
- 22) ?Onón ?ék ru tap an a?
(あの人は) どこから来た のか。
- 23) Te?en ?ek!
こちらへ おいで。

7.3 地理的な上下の対立が有効となる場合

川の流が意識にのぼるとき、すなわち河川を軸とする上下の対立に関心が向けられるとき、?omán/payé と ?ék/?árki は上向きの移動を示すときにのみ用いられる (図9)。

下向きの移動では、川に対して平行か垂直かが区別され、目標点と出発点の対立は無効になる (図10)。これらの動詞は方位を示す副詞といつも一緒に用いられるわけではない。次の例文を見られたい。

- 24) ?Ásnap ari payé-?án ?e?áykap. Sáp-án hi ta ?anak ?ásnap ne yakkay pírka.
權で上る (payé-?án) ことはできない。下る (Sáp-án) ときは權でもよい。(上るときは棹を用いる)
- 25) ?Asór kotan ?or en ku-?óman tek ?árukuran ku-né tek ku-sán nankor kus pírkanó sirúye yan ani!
足寄村へ行って (ku-?óman) 一晩して戻って来る (ku-sán) から、ちゃんと留守番していなさい。
(足寄村は利別川沿いの、本別よりは川上に位置する集落)

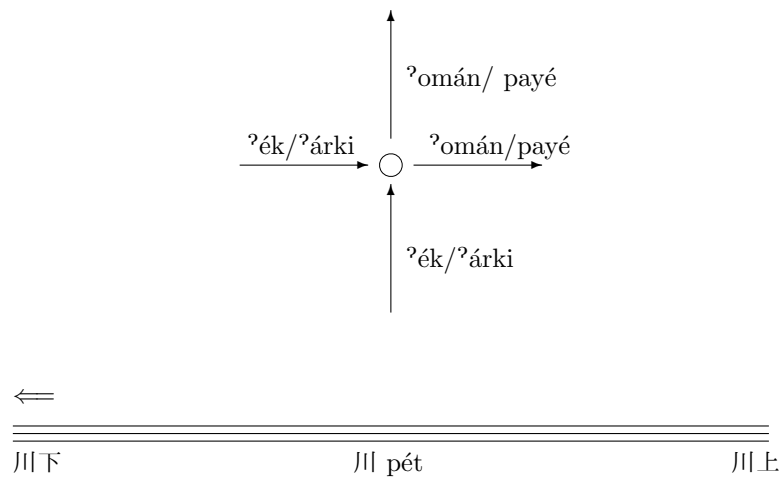


図8 上（かみ）への移動

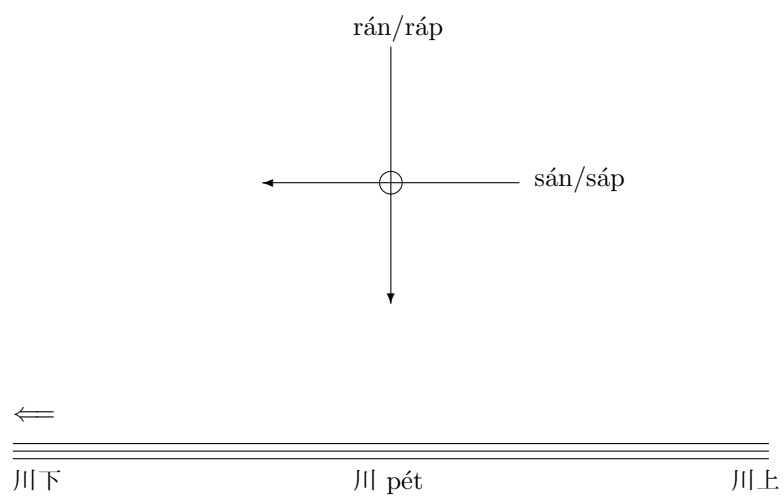


図9 下（しも）への移動

7.4 ʔekímun と ʔokímun

先に触れた ʔekímun/ʔokímun の組は、ʔomán/payé, sán/sáp とともに用いられる。

26) Kuʔiramante kus ʔekímun ku-ʔóman tek ʔokímun ku-sán ru ʔestap an ne.

わたしは狩りをするために山へ (ʔekímun) 行って (ku-ʔóman)、山から ʔokímun) 戻ってきた (ku-sán) のですよ。

7.5 謎 urekrek の新しい解釈

地理的な上下の対立が関与する場合の移動を表す動詞の意味が、より限定されたものだとするならば、次のようなよく知られているアイヌの謎々 urekrek も今一つ立ち入った解釈できるのではないかと思われる。今、知里真志保の解釈を示す。

27) oman aine shituri-p nep ta an? — tar.

最後にくれば伸びるものは何であるか？ — 荷負繩。荷負繩は、山へ持って行く時は、適宜に巻いて持って行くが*13、焚木などを縛る際には、それを解いて地上に伸ばすのである。[2, p.387, 389]

28) oman aine e-ni-tom-oshma-p nep ta an? — mukar.

しまひにはどしんと木にぶつかるものは何であるか？ — 鉞。^{まさかり} [2, p.387, 398]

知里は oman aine を「最後にくれば」「しまひには」と訳しているが、先に見いだした ʔomán の意味を適用するならば oman aine は「山に行って」と解釈すべきではなからうか。「最後にくれば」「しまひには」はむしろ aine の訳である。aine は、密接に関係し合う 2 つのできごとの時間的前後関係を表す接続助詞であり、接続する前文と後文のうち前文で示されるできごとが時間を要するものであるときに用いられる。「山に行く」という行為は時間を要する。なお、十勝の本別の方言では、aine は ʔahínne となる。

8 家屋の内部での方位と移動

河川を軸とする上下の対立は部分的に家の中での移動の表現にも反映されている (図 11)。家の下座 ʔúsar から上座 ror-ún-so への移動は、ʔe-rór-un ʔomán 「～が上座へ行く」、ʔo-ʔúsar-un ʔék 「～が下座から来る」と言われ、戸外での上^{かみ}への移動と並行的であり、一方、上座から下座への移動は ʔe-ʔúsar-un sán 「～が下座へ下る」、ʔo-rór-un sán 「～が上座から下る」と言われ、戸外での下^{しも}方向への移動と並行的に「行く」と「来る」の対立が失われるのである。

また、これとは別に、炉に近づくことを sán/sáp で示すことがあった。これはすでに『アイヌ語方言辞典』で田村すゞ子により指摘されていることである。そこでは「下りる」の項で示される沙流方言の sán/sáp について、

山から里へ、川上から川下へと（下りる—切替）

*13 荷負い繩 tár の巻き方の一例は [33, p.73] に見られる。

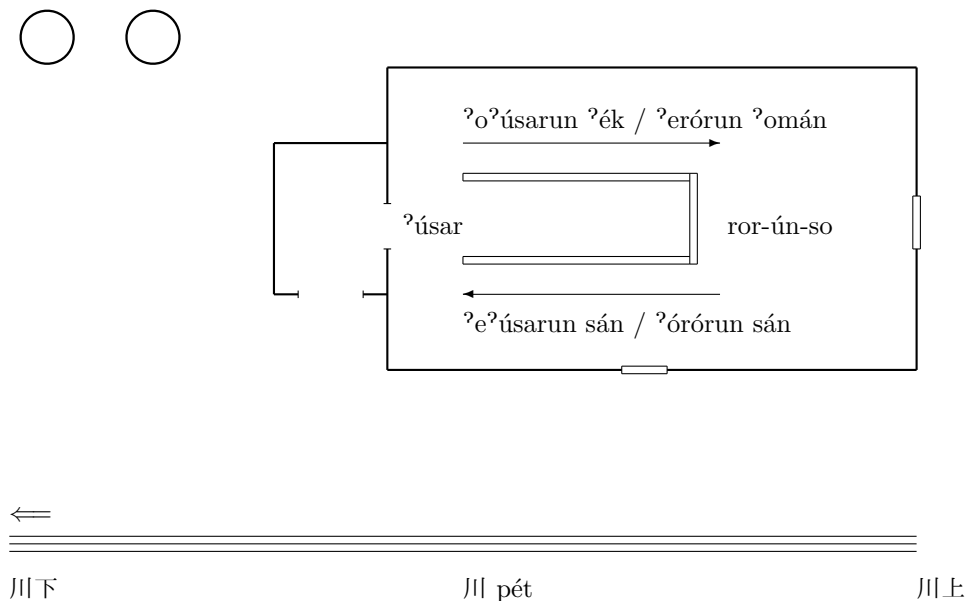


図 10 家の中での移動

と記述されているのに続いて、

火のそばに行く

という意味も付記されている [9, p.241]。胆振地方のユーカラにも次のような一節がある [12, p.50]。

- 29) Inkar-kusu さても
 apo-tonoke わが子どもの
 eeshipopkep お身の装いものを
 mi wa 着て
 abe-sam ta san! 炉ばたへ おりなさい !

十勝の本別の沢井トメノ氏の言語にも火に当たるため炉に近寄ることを示す *sán* の例がある。

- 30) Ná sá ta sán wa ?apékur!
 もっと炉に近づいて火に当たりなさい。

川下にいる人が川上にいる人を呼び寄せるとき、

- 31) Ná sá ta sán!

と言うことがある。この戸外で言われる句が家の中で炉に近寄ることに用いられるのは、炉を海に喩えるという修辞法が口承文芸で行われていることと無関係ではあるまい。

32)	rep-o-usat	沖の火種を
	ya-o-raye	陸にやり
	ya-o-usat	陸の火種を
	rep-o-raye	沖にやり
	tu utursama	ときどき
	re utursama	あいだあいだ
	otke kane	(火箸で灰を) 突き刺しながら
	naipa kane	(灰を) ならしながら

これは、炉をいじりながらもの思いにふける情景で、胆振地方のユーカラの一節である [11, p.40]。

炉ぶち木を ?inúnpe というが、Batchelor の辞典によれば、?inún は「～が魚の群衆を見張る」という意味の一項動詞であるらしい。したがって、?inúnpe は、「魚の群衆を見張るもの」という意味を持っていたかもしれない。

また、炉鉤に掛けてある鍋 sú を炉ぶちに引き上げることを

33) sú yán-ke ～が鍋を炉縁に引き上げる

というが、yán/yáp は海や川から陸にあがるという意味である (yán-ke/yáp-te 「～が～を陸にあげる」)。これもまた炉が海に喩えられた一例である。

sán/sáp 「～が川なりに下る」と rán/ráp 「～が川に降りる」と yán/yáp 「～が陸にあがる」はそれぞれ sá 「下手」、rá 「川の手」、yá 「陸」という名詞的語根から作られた一項動詞である。

8.1 pét と náy——「川」を意味する二つの単語

アイヌ語には「川」を意味する単語が二つある。pét と náy である。私は pét が水の流れそのものを示す単語であり、náy はそのような水を流す樋ではないかと考えている。石狩方言の話し手であった砂沢クラ氏の『私の一代の思い出』[18]には、nay ot ta riyap 「～が náy の中で越冬する」、nay ot ta kuca kar 「～が náy の中に狩り小屋を建てた」、ku are nay 「仕掛け弓が仕掛けられた náy」、nay asam ta yacipoci an 「náy の底にやち（低湿地）がある」、nay kotor koapkas 「～が náy の斜面を歩く」などの用例があり、náy が樋ではないかという仮説が裏付けられる。一方、pet poro 「大水になる」、pet sama ta 「pét の傍らに」は、pét が水の流れそのものを示していると見られるほぼ確実な用例である。沢井氏に山間の狭い谷を写した写真を示して、何と呼ぶかと尋ねると ?o?ár pón pet 「とても小さな流れ」と答えたことがある。そのとき沢井氏は谷ではなく、谷底の流れに着目したのだと解せられる。であるから、náy を「沢」と訳すのは誤りではないが、山間の細い流れとみなすことは誤りである。それは pét ないし pón pet 「小さな流れ」である。

沢井氏によれば、náy turasi rán 「náy にそって下る」と言えるが、*náy turasi sán とは言えないとのことである。これは、樋であることが際だつ支流や、本流であっても上流部での移動を表す句だと考えられる。一方「pét にそって下る」は、pét turasi sán となる (pét turasi rán とは言わない)。

沢井氏は自宅近くを流れて利別川 Tús-pet にそそぐ二つの小川 pón pet について語ったことがある (図 12)。そのうちの一つ Sokón?us-nay は、氾濫原に出たからは沢井氏の家のすぐ近くを流れ、かつ家の付近では利別川にほぼ平行して流れている。もう一つの小川の Húrat-nay は家からやや遠く 1.5km ほど離れて氾濫源に現れ、概略 Tús-pet に対して垂直に流れている。次の二つの例文は、このような二つの小川の流れ方の違いを一方は sán/sáp で、もう一方は rán/ráp で表したものである。

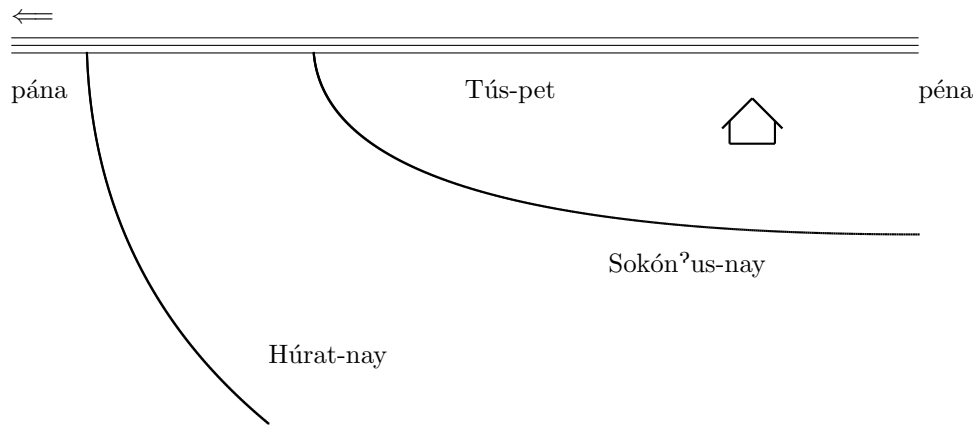


図 11 2つの小川の流れ

34) Né²an pón yámwakka ²etúk hi wa pónno pónno ²u²ékarpa ²ahinne pón pet né wa to²ónen sán ahinne poró pet ²or pak sán.

その（自宅の裏の丘の）湧き水の出ているところから少しずつ水が集まって、（Sokon²us-nay という）小川になって、あちらへ下って行って（sán）、大川（Tús-pet のこと）まで下って行く（sán）。

35) Húrat-nay turasi ráp-án ahinne Tús-pet ²ari ré²an poró pet ²or ta ráp-án.

Hurat-nay に沿って下っていく（ráp-án）と Tús-pet と呼ばれる大きな川に至る（ráp-án）。

なお、前の節で胆振のユーカラから炉を海に喩えた箇所を引用したが(32)、その最終行に naipa という動詞がでていた。これに対して、金田一は次のように注を記している [11, p.40]。

naipa 「すじを引く」（naye の複数形）火箸で炉の灰の中へすじをつけたりした。因みに、神が地面へ指ですじを引いた、naye したのがすなわち nai。

これは、民間語源説 folk etymology のように思われるが、nay が樋だとする仮説を支持する証拠の一つと言えるかもしれない。

9 海に見られる上（かみ）と下（しも）

太平洋沿岸地方のアイヌは海においても地理的な上下の対立を認めていたらしい。胆振地方幌別（図 17）出身の知里幸恵の『アイヌ神謡集』には、shi-atui-pa 「海の東」、shi-atui-kesh 「海の西」という単語が見られる。日本語訳も幸恵のものである [6, pp.88-89] [7, pp.110-111] [14, p.115]。

- 36) *shi-atui-pa wa* 海の東へ
shi-atui-kesh wa 海の西へ
humpe utar 鯨たちが
shinot shir konna パチャパチャと
chopopatki ko, 遊んで居る。すると

これらの単語はそれぞれ次のように解釈される。

- 37) *shi-atui-pa* 本当の・海（の）・^{かみ}上 海の東
 38) *shi-atui-kesh* 本当の・海（の）・^{しも}下 海の西

この例から、東が *-pa* 「^{かみ}上」、西が *-kesh* 「^{しも}下」と考えられていたと推察される。また、『アイヌ神謡集』には次のような文が見られる [6, pp.88-89] [7, pp.112-113] [14, p.116]。

- 39) *atui noski ta* 海の中央に
shinokorhumpe 大きな鯨が
upokor humpe 親子の鯨が
heperai 上へ
hepashi 下へ
shinot shir パチャパチャと
chopopatki 遊んでゐる。

ここに見られる *heperai* 「上へ」、*hepashi* 「下へ」という副詞は、先に述べた十勝地方本別での *ʔepéray* 「川上へ」、*ʔepási* 「川下へ」に対応する。この箇所は「鯨が東へ西へと泳いでいるのが見える」と解釈される。

もしかすると、太平洋のみならず日本海にも^{かみしも}上下があり、かつ、川を軸にした上下の関係が海の上^{かみ}下^{しも}にも投影されていたかもしれない。篠崎俊幸氏が抄録を残した、石狩地方の門野トサ氏が伝承していた昔話 *tuytak* には次のような方位を表す単語がみられるという (*epasi*, *epera* はそれぞれ本別の *ʔepási* 「川下へ」と *ʔepéray* 「川上へ」に対応する石狩の形)。 [23, p.91]。

- 40) *epasi* 下へ、沖の方を向いて左手へ
 41) *epera* 上へ、沖の方を向いて右手へ

もっともこれは、海における^{かみしも}上下ではなく、単に石狩川を座標軸にした方位を海浜に拡張したものなのかもしれない。

9.1 山脈に見られる上（かみ）と下（しも）

東静内には、長さおよそ 3km にわたって北西から南東に連なる小高い山脈がある（図 15）。日高山脈から独立した山塊で、浜から見てその手前にあり、三石川の左二股を遮るように立っている。日本語で「横山」と呼ばれているようである。「20 万分の 1 図浦河」（国土地理院）では南東のピークが 656 とされ、北西のピークが 725 とされている。東静内の葛野辰次郎氏によれば、この小山脈 *Samatki* 「横たわるもの」の南東のピークは *nupuri-pa* 「山の上^{かみ}」と呼ばれ、北西のピークは *nupuri-kes* 山の下^{しも}」と呼ばれたとのことである [24, p.111]。

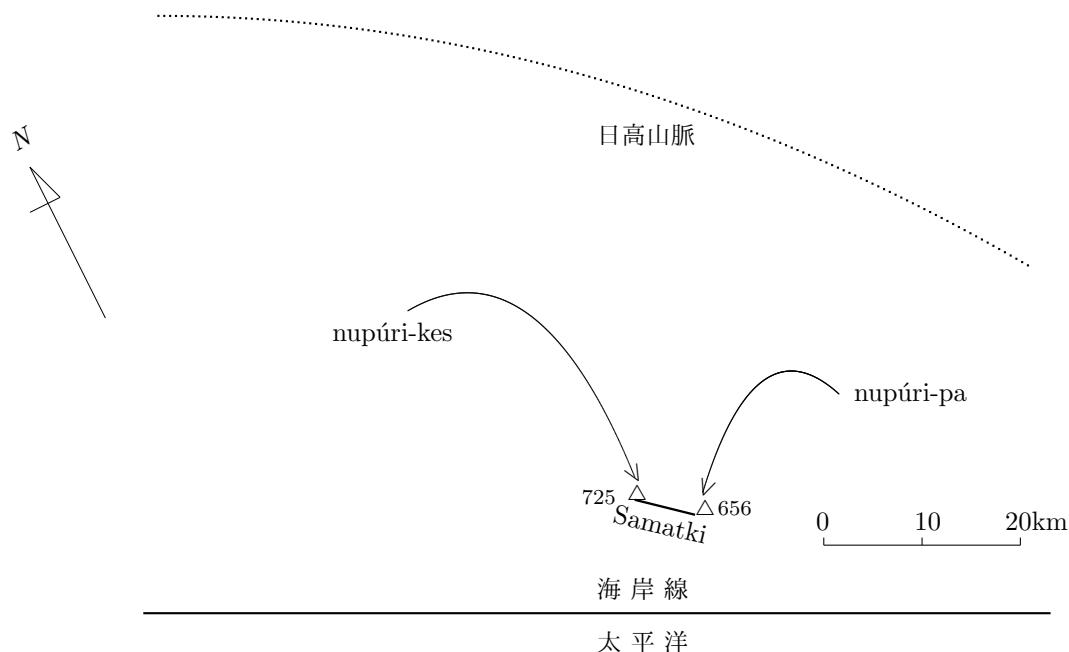


図12 Samátkiに見られる上（かみ）と下（しも）

9.2 浜にそった移動

内陸部の本別（十勝川水系の利別川流域にあるから、広い意味で太平洋沿岸地方に含めることができる）の沢井トメノ氏は、「北」すなわち川上とともに (§5)、「東」も *kamúy ?er/ok kotan* 「神の住む世界」と認識している。一方、家の西側には *?ekás nusa* と呼ばれる幣柵がある。そこには先祖を祭る幣が並んでいる（「祖父」とか「老人（男性）」を意味する単語が *?ekasi* と第一音節にアクセントがあるのに対して、この幣柵の名では、*?ekási* と第二音節にアクセントがあることに気がついたのは高橋靖以氏である）。西の方角が死の世界と深い関係にあるものと推察される。

このような東方上位の観念は移動の動詞の用いられ方にも反映されている。

42) *Kusúr ?or pak ku-?óman tek ku-sán nankon na.*

わたしは釧路まで行って (*ku-?óman*) 来ます (*ku-sán*)。

43) *Kusúr ?or wa sáp ?utar ?anakne ?okánpap kor wa ?árki.*

釧路から来た (*sáp*) 人たちは、難しい問題を抱えて来た (*?árki**14)。

44) *Acúnay pakno kisá ?ari payé-?án tek or wa kisá ?or wa ráp-án cikanakne ?atúy sam peka ?otópo ?osíppa?-án pokon ?atúy sam peka súp-án. Konpukarusi ?or en sinéwpa?as kus sápan.*

厚内まで車で行き (*payé-?án*)、車から降りた (*ráp-án*) なら浜づたいにもどるように（歩い

*14 最後に *?árki* が現れる理由はよく分からない。浜づたいにやって来て、十勝川河口で海岸から離れて以降の路程を言っているのかもしれない。

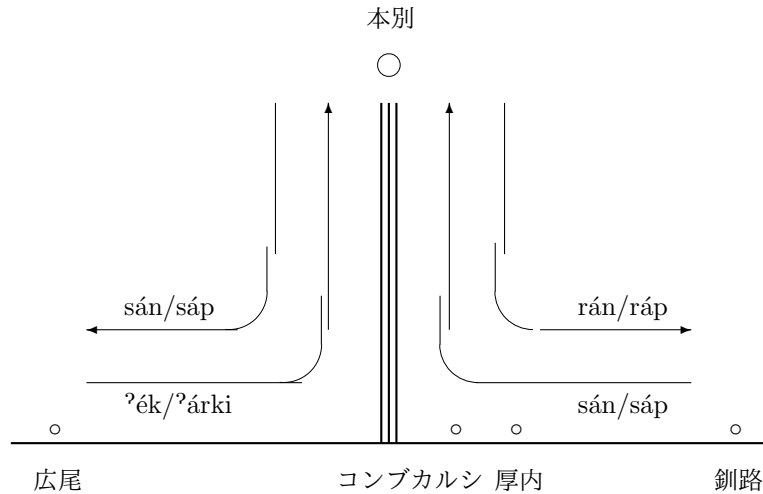


図 13 本別と沿岸地方との間の移動

て) 行く (*sáp-án*)。コンブカルシへ遊びに行く (*sáp-án*^{*15})。

45) Piró'o ?ari ?en ku-sán. ?Atúy sam ?en ku-sán tek Piró'o kotan ?or en ku-sán wa ku-?ék.

わたしは広尾というところへ行く (*ku-sán*)。浜へ下りて (*ku-sán*) 広尾村へ行って (*ku-sán*) 来る (*ku-?ék*)。

以上の例文に現れる移動の動詞を川に沿った上下移動などの例を除いて整理すると図 16 のようになる。東方つまり釧路の方角が上として認識されており、西方つまり広尾の方角が下として認識されていることが分かる。

9.3 神窓の向き

先に「神窓」が上流を向いていたことを見てきたわけであるが (図 1)、実はこのタイプの家屋構造は普遍的なものではない。図 17 に見られる矢印は幌別のものを除き我々が実際に聴取した「神窓」の向きを示したものである。^{*16}

「神窓」が東を向いていて、それが東方上位の原理に従っていると見なせるのは太平洋沿岸地方でも沙流川流域地方以西に限られている。名取武光 [17] は千歳アイヌの祖印 (男系の系譜を示す印) と口碑の研究から千歳アイヌがもと日高の沙流川流域と胆振の鷺川から移動してきたものであることを明らかにした。この内陸

^{*15} この *sáp* は次の例文の ?atúy sam ?en ku-sán 私は浜へ下りる」と同じ用例で、川下方向、つまり十勝川を伝う浜への移動を表すものであろう。

^{*16} 「神窓」の向きは以下の文献から知られる。長万部 [34, p.84]、虻田 [29, p.118]、白老 [23, p.9]、鷺川 [30, p.64,69]、千歳 [31, p.71]、新平賀 [33, p.21]、荷負 [28, p.55]、静内 [24, pp.90-92]、東静内 [32, p.67]、浦河 [25, p.126,130]、様似 [25, p.133]、帯広 [27, p.58]、屈斜路 [26, pp.101-103]、虻別 [35, p.62]、美幌 [26, p.96]、旭川 [22, p.85]。白糠では、神窓の向きがどうであったかインフォーマントによって一定しない [33, p.100-103]。

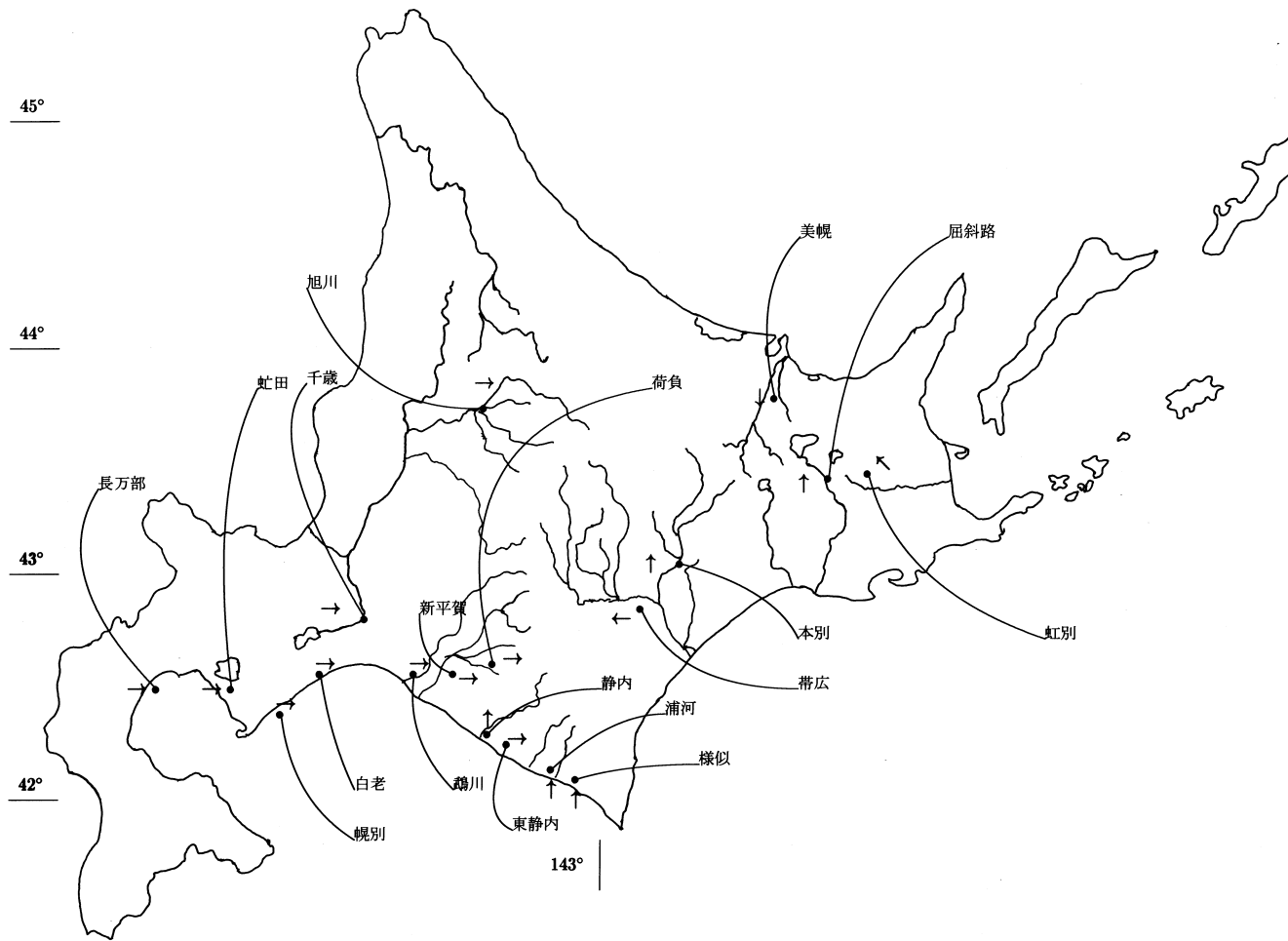


図14 Rorúnpuyar の向き

地方では、「神窓」は東に面しており、したがって千歳川の下流を向いているのである。

東静内での向きは、葛野辰次郎氏が答えたものであるが、これをどのように考えるべきかはまだ分からない。分布としては不自然である。

十勝の本別では東方上位の考え方が認められたが、「神窓」の向きを規定しているのは川上を上位とする原理である。

旭川では「神窓」は東向きとなっているが、これは川上の方角でもある。どちらが決定要因になっているか、はっきりしない。

なお、胆振地方幌別でも「神窓」 rorunpurai は東を向いていたらしく、『アイヌ神謡集』では「第一の窓」 [6, p.9], [7, p.17], [14, p.47] とも訳されているが、「東の窓」 [6, p.11,95], [7, p.19,119], [14, p.49,121] とも訳されている。さらに、rorunso (図1) も「上の座」 [6, p.97], [7, p.121], [14, p.123] とか「東の座」 [6, p.99], [7, p.123], [14, p.125] と訳されている。

9.4 東と西を示す単語

これまでにあげた例から、内陸部の本別、千歳を含む太平洋沿岸地方には東を上とみる考え方が行われていたことが明らかになる。

アイヌ語地名研究の第一人者であった山田秀三は、koi-ka「東」と koi-pok「西」という方位を表す単語を構成要素として含む地名が太平洋沿岸に偏在していることを見出した。また、これらの語がそれぞれ「波（の）上」「波（の）下」という意味に解釈できることから、この方位の名称の起源を千島海流に帰した。千島海流は千島列島から北海道南岸にかけて北東から南西に流れる寒流である。なお、図6に日高地方東部、類似の ekoykaun「東へ」と ekoypokun「西へ」が見られる。

なお、山田秀三による地名の分布論的研究 [38, p.305] が明らかにしていることの一つに「釧路川平野」「十勝川平野」「日高西部から勇払東部」の三箇所で koy-ka/koy-pok を含む地名の分布が途切れているということがある。沢井氏の伝承する本別（十勝川平野）の言語にもこれらの単語はない。この分布が意味していることはまだ明らかになっていない。比較的大きな川の流域で途切れているということだろうか。

Upward and Downward Direction — Orientation of the Ainu

Hideo KIRIKAE

(Hokkai Gakuen University)

1. The axis for orientation
2. Rivers as ways for traveling
3. Affixes meaning 'head' and 'end'
4. Along a river
5. The plan of the Ainu house oriented by the river
 - 5.1. Setting of a stove
6. Terms of direction
7. Four verbs of movement
 - 7.1 System of four verbs of movement
 - 7.2 Cases where geographical up-or-down relationship is irrelevant
 - 7.3 Cases where geographical up-or-down relationship is relevant
 - 7.4 *ʔekímun* 'to the mountain' and *ʔokímun* 'from the mountain'
 - 7.5 New interpretation of *urekrek*, riddles
8. The upward and downward movements inside the house
9. *pét* and *náy*, the terms of 'river'
10. *mák*, a term of direction — the origin of the toponym *Makomanay*
11. The upward and downward direction on the sea
 - 11.1 The head and the end of a mountain range
 - 11.2 Movement along the coast of the Pacific
 - 11.3 Alignment of the sacred window
 - 11.4 Terms of the east and the west

参考文献

- [1] John Batchelor. アイヌ・英・和辞典. 岩波書店, 4 版, 1938.
- [2] 知里真志保. アイヌ民俗研究資料第二. 日本常民生活資料叢書, 第 7 巻, pp. 276-412. 三一書房, 1936/1973.
- [3] 知里真志保. アイヌ語法概説. 知里真志保著作集, 第 4 巻, pp. 3-197. 平凡社, 1936/1974.
- [4] 知里真志保. アイヌ語法研究. 知里真志保著作集, 第 3 巻, pp. 455-586. 平凡社, 1942/1973.
- [5] 知里真志保. 地名アイヌ語小辞典. 北海道出版企画センター, 1984. 復刻版.
- [6] 知里幸恵. アイヌ神謡集. 弘南堂書店, 1923/1970.
- [7] 知里幸恵. アイヌ神謡集. 岩波文庫. 岩波書店, 1923/1978.
- [8] 大丸裕武. 完新世における豊平川扇状地とその下流氾濫原の形成過程. 地理学評論, Vol. 62, No. 8, p. 589.
- [9] 服部四郎（編）. アイヌ語方言辞典. 岩波書店, 1964.
- [10] 犬飼哲夫. 北海道の鹿とその興亡. 北方文化研究報告, No. 7, pp. 1-45, 1952.
- [11] 金成まつ（筆録）, 金田一京助（訳注）. アイヌ叙事詩ユーカラ集 III. 三省堂, 1963.
- [12] 金成まつ（筆録）, 金田一京助（訳注）. アイヌ叙事詩ユーカラ集 VII. 三省堂, 1966.
- [13] 金田一京助. アイヌユーカラ語法摘要. ユーカラの研究, pp. 1-233. 東洋文庫, 1931.
- [14] 切替英雄. アイヌ神謡集辞典. 大学書林, 2003.
- [15] 松浦武四（解説秋葉實）. 戊午東西蝦夷山川地理取調日誌（上）. 北海道出版企画センター, 1985.
- [16] 永田方正. 初版北海道蝦夷語地名解. 草風館, 復刻版, 1984. 初版 1890.
- [17] 名取武光. 千歳アイヌの祖印. アイヌと考古学（二）名取武光著作集 II, pp. 291-300. 北海道出版企画センター, 1949/1974.
- [18] 砂沢クラ. 私の一代の思い出 クスクブオルシベ. みやま書房, 1982.
- [19] 田村すず子. アイヌ語沙流方言の合成動詞の構造. アジア・アフリカ文法研究, No. 1, pp. 73-94, 1973.
- [20] 田村すず子. アイヌ語沙流方言辞典. 草風館, 1996.
- [21] 渡辺仁ほか. アイヌ民俗文化財調査報告書 1-16. 北海道教育委員会, 1981-1997.
- [22] 渡辺仁ほか. 昭和 56 年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1982.
- [23] 渡辺仁ほか. 昭和 57 年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1983.
- [24] 渡辺仁ほか. 昭和 58 年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1984.
- [25] 渡辺仁ほか. 昭和 59 年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1985.
- [26] 渡辺仁ほか. 昭和 60 年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1986.
- [27] 渡辺仁ほか. 昭和 61 年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1987.
- [28] 渡辺仁ほか. 昭和 62 年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1988.
- [29] 渡辺仁ほか. 昭和 63 年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1989.
- [30] 渡辺仁ほか. 平成 1 年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1990.
- [31] 渡辺仁ほか. 平成 2 年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1991.
- [32] 渡辺仁ほか. 平成 3 年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1992.
- [33] 渡辺仁ほか. 平成 4 年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1993.
- [34] 渡辺仁ほか. 平成 5 年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1994.

- [35] 渡辺仁ほか. 平成6年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1995.
- [36] 渡辺仁ほか. 平成8年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1997.
- [37] 山田秀三. 札幌のアイヌ地名を尋ねて, アイヌ語地名の研究 山田秀三著作集, 第3巻. 草風館, 1983. 初版1963.
- [38] 山田秀三. アイヌ語地名分布の研究 古代北方文化資料に. アイヌ語地名の研究, pp. 185-334. 1, 1982.